



・ペレットストーブ『ソロー』(給排気管とも)
 本体226,000円+取付費16,200円(税込み・配達料無料)
 ・茨城産ペレット
 200キロ(20袋)
 12,960円(税込み・配達料無料)



ソロー守谷体感ルーム

茨城県守谷市松ヶ丘 3-20-1
 電話 0297-38-6621

駐車場有

【交通】
 ・守谷駅中央西口から関東鉄道バス「美園循環」乗車「松ヶ丘3丁目」で下車徒歩2分。
 ・守谷駅西口からタクシーで約5分。



ソロー水戸体感ルーム

茨城県水戸市元吉田町1477-11
 電話 029-291-5321

駐車場有

【交通】
 ・水戸駅南口2番バス乗り場から関東鉄道バス「吉沢車庫」行き「一里塚西」で下車徒歩1分。
 ・水戸駅南口からタクシーで約5分。



ぜひ、実際の火のぬくもりを「体感ルーム」で確かめてください。

● 営業時間午前10時～午後7時
 ● 定休日 毎週水曜日・年末年始
 ● 体感ルームに限り日曜祝日も営業します。



【今月の森人】
 荷見信孝さん (6頁参照)

ソロー茨城
 『通販生活』でおなじみのカタログハウスが展開する間伐ペレット普及のための事業部です。

事業部名「ソロー」はアメリカの詩人、博物学者、ヘンリー・デイヴィット・ソロー(1817～1862年)の名前に由来します。ソローは1844年にウォールデン湖周辺の森林破壊を阻止したいと湖の北岸に小舎を建て、そこで代表作『森の生活』(岩波文庫上下巻・飯田実訳)を書き上げました。

その中でソローは、人はいきていくために衣食、住の他に燃料も必要であると語り(上巻26頁)、さらにおどろくべき事実を指摘しています。

たいていの町の森には、多くの家庭で燃やすのに十分な、あらゆる種類の薪や枯れ木がころがっているのに、いまのところはひとをあたためるには少しも役立っておらず、かえって若木の成長をまたげていると考えるひともいる。(下巻141頁)

『森の生活』の発行は1854年ですから、今から161年前。その頃すでに石油温水暖房の普及によって森林の手入れが十分でなくなってきた事情をうかがわせる一節です。



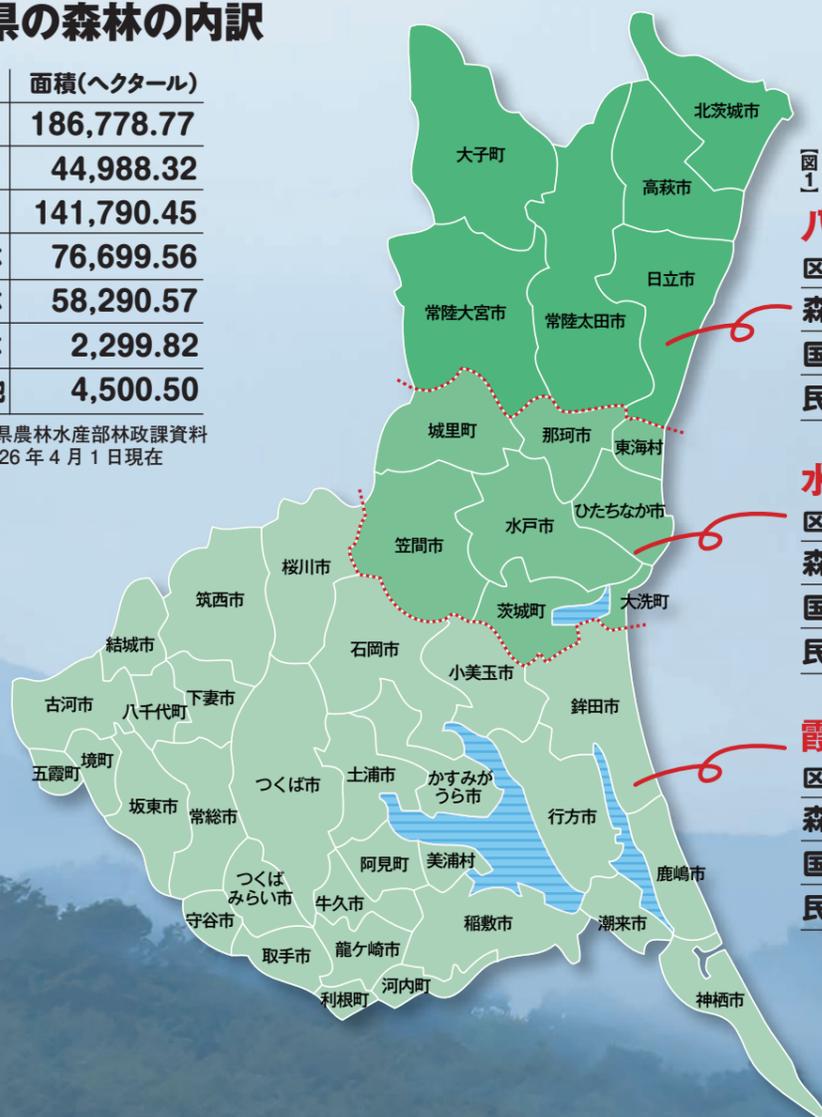
カタログハウスのペレット事業部
ソロー茨城
 茨城県石岡市小見 1048-1

お問合せ・お申込み
0120-058-059 月～金は午前9時～午後7時
 カタログハウス・お客様センター 土曜は午前9時～午後6時
 日曜祝日は休業。

茨城県の森林の内訳

区分	面積(ヘクタール)
森林面積	186,778.77
国有林	44,988.32
計	141,790.45
人工林	76,699.56
天然林	58,290.57
竹林	2,299.82
無立木地	4,500.50

茨城県農林水産部林政課資料
平成 26 年 4 月 1 日現在



3つの森林計画区

八溝多賀森林計画区

区分	面積(ヘクタール)
森林面積	112,999.91
国有林	35,463.71
民有林	77,536.20

水戸那珂森林計画区

区分	面積(ヘクタール)
森林面積	28,523.93
国有林	5,554.75
民有林	22,969.18

霞ヶ浦森林計画区

区分	面積(ヘクタール)
森林面積	45,254.93
国有林	3,969.86
民有林	41,285.07

茨城県農林水産部林政課資料
平成 26 年 4 月 1 日現在

茨城の森の明日を 考えるための基礎知識

連載第①回

「美しい森林」をつくる 高い果は、茨城県です。 なぜかというところ……。

美しい森林は、木を植え、育て、伐って利用する、再び植える…

この「緑の循環システム」が機能しつづけることで維持されます。

そして、このような「美しい森林」をつくれる可能性がもつとも高いのが

茨城県だと私たちは考えています。

その根拠は、茨城県の森林率が全国で2番めに低い30.7%だからです。

つまり、茨城県は、平地の面積に比べて森林の面積比率が全国で2番めに小さい。

1番めは大都市の大阪ですから、実質は「1番めに森林率が低い県」と

言っていないでしょう。面積比だけで言えば「美しい森林づくり」に

もつとも有利な条件を持っていると言っていないのではないのでしょうか。

前田陽一(ライター) / 千葉慶一(ソロー茨城)

茨城の人工林の6割はスギ。その多くは
樹齢41年以上で、伐採適齢期を迎えています。

森林面積——茨城県内の森林面積は18万7000ヘクタールです。このうち、全体のおよそ4分の3にあたる約14万2000ヘクタールが民有林で、国有林は約4万5000ヘクタールにとどまります。

行政的には、【図1】のように、県南の「霞ヶ浦」、県央の「水戸那珂」、県北の「八溝多賀」と、大きく3つの区域に分けられ、計画的に管理されています。これを「森林計画区」と呼びます。

民有林——戦後、積極的にスギ、ヒノキの人工造林が進められ、その蓄積が着実に増加しつつあります。

【図2】をご覧ください。民有林の森林構成は人工林、天然林、竹林、無立木地(むりゅうぼくち)の4区分に分けられます。

茨城県における面積の内訳は、人工林54.1%、天然林41.1%、竹林1.6%、無立木地3.2%(木が生えていないこの面積には伐採跡地も含まれる)となっています。

人工林では、6割以上の面積にスギが分布し、そのおよそ85%が樹齢41年以上の高齢林です。また、天然林のほとんどは雑木ですが、マツやクスノギなどの高齢林もわずかで見られます。

国有林——森林構成をみると、「霞ヶ浦計画区」では、人工林がおよそ6割で、その約半分をヒノキが占めています。樹齢21年以上40年以下が4割と、間伐適齢林が多いのが特徴です。

「八溝多賀計画区」では、人工林の占める割合が8割以上になり、樹種別ではヒノキとスギがそれぞれ4割ほど分布しています。「霞ヶ浦計画区」に比べ、樹齢41年以上の木が6割以上と多く、利用期(伐採期)を迎える樹木が多くなっています。

人工林率が8割以上と高い「水戸那珂計画区」では、スギ20%、ヒノキ50%が生育しており、齢級別では、幼齢林の5%に対し、樹齢41年以上の高齢林が68%と高く、こちらも伐採期を迎えています。

ご存知ですか、森林保護の発祥地は茨城県だったことを。

ここで江戸時代の森林管理にタイムスリップしてみます。茨城県のもともともである水戸藩は、水戸から県北、栃木県の一部に所領を構えており、多くの森林を治めていました。藩の所有林は「御立山」(おたてやま)と呼ばれ、藩の用材の調達に利用されていました。その当時はマツ・スギ・ヒノキが重宝され植栽もするようになりました。

一方、農民たちの私有林である「分附山」(ぶんづけやま)と呼ばれる森林や「入会山」(いりあいやま)と呼ばれる共同管理の森林もありました。

これらには管理する役人がおり、植林や落ち葉の管理まで細々とした決まりがあり、放火などには厳罪が課せられました。彼らは森林を守るために下草刈りや枝打ちなどの作業を行い、畑作業と同じように森を育ててきました。しかし、それは次世代へと森を受け渡す息の長い作業なのです。

そして時代は明治、大正へ。

藩の管理は国の管理へと移り、「御立山」は「官有林」となり、国の管理下で森林の保全が行われるようになりました。

そして昭和9年、全国植樹祭の発祥ともなった「愛林日記念植樹」が、桜川市真壁町の筑波山麓の山林で行われ、スギとヒノキが植樹されました。その記念碑が86年



写真提供／関東森林管理局

に建てられ、70年以上経ったスギ、ヒノキの美林の中に残されています(右頁写真参照)。

「愛林日記念植樹」は茨城県内で第5回まで開かれました。

戦後の全国植樹祭は毎年開催されていますが、76年に大子町、05年に潮来市で開催されています。

伐採に適した樹齢は、「スギ40年、ヒノキ45年」と言われます。

いま、茨城の森林を私有林に限って調べると、人工林の樹齢別分布は樹齢36年生(8齢級)以上の樹が約75%を占め、「スギ40年、ヒノキ45年」の伐採期を迎えています。

さらに、近年は、バイオマスへの関心も高まり、これまでの材としての需要だけでなく、活用の幅が広がっています。

また、環境保全としての森林整備とあわせて、資源としての森林、つまり産業として林業を育てていくことも重要です。

外材に押されて県内産の材の生産が厳しい状況に置かれる中、県内の農林家は優良な県内産の木材需給量を上げるために頑張っています。

とくに県北を中心に昔ながらの林業を生業とする「林家」(りんか)は健在です。全国規模で見ると、私有林に

おける林業就業者の雇用は、造林・素材生産業者としての森林組合、会社、個人が主体になっています。

「2010年世界農林業センサス」によると、茨城では保有山林規模が1ヘクタール以上の「林家」数は1万6千564戸を数えますが、その80%は保有山林5ヘクタール以下の小規模林家です。

「林家」以外の「林業経営体」数は、3ヘクタール以上の山林保有者または林業事業体が1778社。そのうち、個人経営体は約96%と高い比率を占めています。

これは茨城県にかぎったことではありませんが、森林作業は小規模な経営体によって担われています。厳しい経営環境のもとで生産性の向上や省力化を図っていくためには、機械化の促進、森林組合の広域合併、個人の協業化・組織化などによる経営基盤の強化が課題だと言われています。(おわり)

「焚火の暖かさは柔らかくていい。薪ストーブと違って排気が室内に出ない」



宗次郎さん (オカリナ奏者)

●常陸大宮市 ソロー歴25日

私 が住んでいる常陸大宮市は山間部の5つの町村が合併したところで、昔から林業を営んでいる人が多い地域です。とくに美和村は「杉と檜の村」と呼ばれていて、良い木材がとれた場所ですが、今は後継者が少なくなってきたせいか、木材を運ぶ車もあまり見かけなくなりました。

『ソロー』は2階のリビングダイニングに置きました。3階の寝室まで吹抜けになっているので、以前は大きなエアコンを使っていたのですが、広すぎて暖まらない。冬は部屋の真ん中に七輪を置いてその前に座っていましたが、今は窓際に設置した『ソロー』の前が私の居場所になりました(笑)。

『ソロー』の温風はすぐそばだとかなり勢いが強いけど、この作業テーブルまで(2メートルほど)離れると本当にやさしい暖かさで心地いい。オカリナは暖めると美しい音が出ますが、『ソロー』のそばで作曲や練習をするとオカリナも暖められて一石二鳥です。これまで1階では薪ストーブを使っていた、結構ススが出るのでこれもそうかなと思っていたら、排気が室内にまったく出てこない。臭いもない。薪ストーブのようにいちいち火を見ながら薪をくべる手間はいらぬし、掃除もラク。着火方法も簡単だからスタッフのそれでもすぐ覚えられて、使い心地、使い勝手、すべて合格です。

陶製オカリナの第一人者。1986年にNHK特集「大黄河」の音楽で脚光を浴びる。オカリナの普及の場として「Sojoro オカリナの森」を建設。



写真左は藤倉潔さん、写真右は奥様の瑠美子さん。

「灯油ストーブとエアコンをつけていたのが、いまはこれだけで暖かい」

藤倉 潔さん

●石岡市 ソロー歴45日

石 岡の冬はマイナス5℃くらいまで下がりますし、うちは2階まで吹抜けなのでなかなか暖まりません。薪ストーブを考えたこともありますが、設置にかなりの費用が必要で、掃除や薪の調達も手間がかかると聞いて断念しました。

エアコン2台に灯油ストーブとこたつも使っていました。エアコンの調子がわるくなって買い替えを考えていたときに『ソロー』の案内が届きました。すぐに水戸の体感ルームへ行って、掃除がラクそうだったので申込みました。朝6時から9時まで使ったら一度消して、中が冷えた10時ごろに掃除します。午後4時ごろにまた火を点けて6時間ほど使います。朝晩は炎が炉の天井まで届くくらいガンガン燃やしますから、ペレットは1日1袋使います。以前は灯油20リットルを3日で使い切っていたので費用はペレットも同じくらいですが、エアコンをほとんど使わなくなったので、電気代は確実に節約できています。

「ペレットが笠間の間伐材と聞いて、笠間出身者としてはうれしいかぎり」

浅野千鶴子さん

●美浦村 ソロー歴33日



『ソロー』は約20畳のLDKのリビングの隅に設置してもらいました。温風が勢いよく吹き出てくるので、灯油ストーブよりも部屋が暖まるのが早いですね。それに奥まったキッチンまで暖まるので、食後にお皿を洗うときも足元が寒くないですよ。平日は、私が仕事から帰ってきた夕方5時ごろから娘が寝る11時ごろまで、6時間くらい使っています。夕食後にソファに座ってテレビを見たり、好きな編み物をしてしていると、身体の芯までじんわりと暖まっています。この暖かさをうまく表現するのは難しいのですが、優しく包みこまれるような暖かさという感じでしょうか。部屋の電気を消して好きな音楽をかけて、ストーブの炎を見ながらゆっくりにお酒を飲んでみると、一日の疲れも吹っ飛んでしまします。わが家でこんな炎を楽しめるなんて、なんてロマンチックなんでしょう(笑)。贅沢なひと時に癒されています。



荷見信孝さん

はすみ のぶたか 43歳 (常陸大宮市)



切り出した材木を運び出す荷見さんの作業道は幅2メートルでつくられている。

「仕事はキツイけど自分の好きなように山をつくれるので、スケールの大きい盆栽をやっているみたいなのが愉しさがありません」

信孝さんは、県外にもその名を知られた茨城を代表する「林家」りんご荷見泰男さんのご子息。07年7月に63歳で急逝された泰男さんのあとを継いで、毎朝8時から山に入る暮らしをつづけて今年で8年め。それでも、まだまだひよっ子と謙遜される。——山を所有しているだけの人は山主、所有している山で林業を営み生計を立てている人が林家……この定義でよろしいですか。「いいと思います。こまかく言うと、10アール以上の林地を持つ者という条件もついていました」——日本の林家は農家以上に経営がきびしいと聞きますが。

「うちの山は作業道を父が沢山つくっておいてくれたのでやっていけますが、わが国の山はインフラが遅れていてあまり作業道はつくってありません。山で食べていこうと思ったら、まず作業道をつくることから始めないといけないし、つくった作業道は放っておくと崩れてしまうのでつねに手入れをしないとイケないし、その辺りの入り口の設計は国がきちんとやってくれないと個人の努力だけでは限界があります」——過性の補助金くらいではムリだということですね。「わが国の山は戦後の住宅不足を解消するために国の政策で成長の速いスギを拡大植林していったのですが、そのあと、放置されてしまいうんですね。きつい林業よりもラクな仕事で稼げる高度成長の時代になったあたりから急速に日本の林業は衰退していきました。林業は長いスパンの仕事です。苗木を植えてからおカネになるまでに50年60年かかりますからね。だから林業をやっている人はほとんど子どもの教育におカネをかけるようになるんです。その結果、子どもたちは医者になったり、商社マンになったりして、山に戻ってこなくなる(笑)。私も8年前まではサラリーマンでした」——それでも、信孝さんのように戻ってつづけ

ていらつしやる人もいます。「やり始めたらやめられなくなる愉しさがありません。自分の好きなように山をつくっていきけるので、スケールの大きい盆栽をやっているみたいなのが愉し。春は植林、夏は下草刈り、秋冬はもつぱら間伐と四季に合わせたホビーみたいな感じがあります」——当面の目標は何ですか。「茨城のヒノキをブランド化したいと思っています。うちで切ったヒノキは常陸大宮の市場で、八溝材として扱われてきましたが、北限のヒノキとして定着させていきたいと考えています。この辺りのヒノキは寒いところで育つのでとても堅くて、土台にしたら最高だと大工さんも言っています」——私もはその間伐材で出てくる曲った木や細木をペレットにさせていたたく仕事を始めたのですが、間伐のルールというか、周期みたいなものはあるんですか。「個人で違うと思いますが、私は10年で30%の間伐を目標にしています。間伐材がペレットの原料として買っていたら知ったら、皆さん、熱心に間伐されるんじゃないですか。これまでの間伐材はおカネを払って捨ててもらっていましたが」